2012年5月10日

JACET-Chubu Newsletter

大学英語教育学会中部支部　No. 28

支部長就任のあいさつ

支部長　大石晴美
（岐阜聖徳学園大学）

このたび、大学英語教育学会中部支部支部長の任にあたらせていただくことになりました。任期は二年です。どうかよろしくお願い申し上げます。

中部支部は、おかげさまをもちまして現在約300名の会員を持ち、一層研究活動を広げております。その一つとして、本年度、支部は大きな役割を担います。国内外からの研究者をお迎えする第51回国際大会を愛知県立大学で開催いたします。昨年度の記念大会から全国大会が国際大会と位置づけられ、国際的に研究を展開する場として中部支部に機会が与えられましたことを大変光栄に存じます。現在、役員一同精一杯尽力し、成功を目指して準備に臨んでおります。

目　次

支部長就任のあいさつ
大石晴美　1頁

JACET第51回国際大会の開催について（予告）
大森裕實　1頁

海外の大学の動向
「学生集めは教員の仕事ではない」
塩澤　正　2頁

研究会紹介
「授業学研究会（中部）」
佐藤雄大　5頁

会員著書紹介
『図説 ことばの世界ー欧米の言語史』
大森裕實　6頁

掲示板　7頁

事務局より　8頁

また、授業学研究会が、中部支部に事務局をおき授業学研究会（中部）とし、今年度から新しく再設されました。その他、支部の活動として、特別研究会とフォーラム、定例研究会などを開催します。それぞれの会では、招待講演者および会員の皆様からの質の高い研究発表を予定しております。わが国の英語教育の発展に向けて、英語教育および関連分野である英語学、応用言語学（社会言語学、心理言語学、脳科学と言語教育など）を対象とし、理論と実践に関する議論を展開させていく計画です。

支部長として、微力ながら役員の皆様とともに頑張っていく所存ですが、このような大役でございますので、支部の皆様の力なしでとても完遂できません。皆様がたのお力添えをいただくようお願い申し上げ、就任の挨拶とさせていただきます。

JACET第51回国際大会の開催について（予告）

大会実行委員長　大森裕實
（愛知県立大学）

大学英語教育学会（JACET）の年次全国大会は、昨年度の第50回記念大会から「国際大会」と位置づけられ、その第51回大会が2012年8月31日から9月2日の三日間、名古屋の東部丘陵地帯に在る愛知県立大学（長久手キャンパス）を会場として開催される。本大会のテーマは「大学英語教育への言語理論の応用ーコンテントとコンテクストを重視して」といういささか硬質感のあるものが設定され、高等英語教育に関わる人々の背筋がすっと伸びる内容となっている。もちろん、学会員の研究成果発表の機会は従来どおりプログラムされているが、それと並んで、国内外から多数の基調講演者、特別講演者、パネリストを迎えた企

画が本大会の feature を形成している。例えば、基調講演として、様々な分野に依拠するアプローチを Ewa Dabrowska (Cognitive)、Ian Roberts (Generative)、David Singleton (CPH & SLA)の三氏が独自の目線から語る。また、全体シンポジウムでは、池上嘉彦氏 (Cognitive Typology)と豊田昌倫氏 (Stylistics)を交えて、白熱した討論が期待される。池上嘉彦氏は特別招待講演も行なう。さらには、社会言語学の本名信行氏と井出祥子氏を加えた中部支部企画シンポジウムも予定されており、三日間で得られる情報量は一週間の集中セミナーに勝るとも劣らない。ただし、それをどのように消化して、自家薬籠中のものとするかは参加者の側にかかっている。

なお、会場となる共催校の愛知県立大学へのアクセスは、意外なほど簡単であり、愛・地球博 Expo 2005 を訪れた経験のある者には懐かしさを感じさせる。地下鉄東山線で終点・藤が丘下車、東部丘陵線「リニモ」で滑らかな無人運転を 13 分楽しめば「愛・地球博記念公園」に到着する。「リニモ」のホームから万博会場跡地（旧青少年公園）の反対側に目をやれば、そこに愛知県立大学の雄姿をとらえることができる。学会の催事に疲れたら、記念公園でサイクリングやジョギングを楽しむのも一案である。また、近くの陶磁資料館で、手捻りで自分の茶器を作り、茶室で悠久の時に思いを巡らすというのはどうだろうか。学会参加の効力には多様性があり、それが明日への活力につながる。今夏、中部支部が総力をあげて取り組む「国際大会」に、是非ご参加ください。

「学生集めは教員の仕事ではない」

塩澤　正
(中部大学)

昨年度１年間、オハイオ大学で在外研究をさせていただいた。アメリカの大学については、大体は分かっていたつもりでいたが、学生として過ごす場合と教員として滞在する場合とでは、見聞きするものの幅や深さが全く違い、初めて知ることも多く、新鮮な驚きがあった。簡単にいくつか紹介してみたい。

まず、学生の授業に対する態度だが、日本の大学生よりはるかに真剣に取り組んでいるのは予想通りだったが、意外にも、日本の学生のように教室の後ろに座り、携帯でメールをチェックするなどの学生も目についた。おおざっぱなアメリカ人だ、文字メールなど絶対にしないだろうと思っていたが、それは４～５年ほど前までの話だ。今や学生間では text mail が日本の学生と同じように連絡の中心となっていた。私も何度も学生たちに “Do you do text?” と聞かれた。No と言えば、面倒な顔をされた。ただ、延々と携帯をいじるのではないところがやはり違う。メールや facebook をチェックするのだが、すぐに、また何もなかったかのように授業に参加し、時には発言までしてしまう。教員も携帯が授業の妨げになっているとは感じていないのか、特に注意もしない。実際、教員が学生に静かにしなさいなどと発言する場面には一度も出くわしたことはない。

ネット環境は羨ましい限りであった。キャンパス内なら屋内・屋外に関わらずどこでも Wi-Fi でネットに接続できた。いやキャンパスを一歩出て

南雲堂の英語テキスト
POWER-UP シリーズ　コミュニケーションに必要な英語の基礎力養成に！ JACET リスニング研究会編　B5 判 1,995 円（税込）～
☆ Power-Up English ＜Advanced 編＞／＜Intermediate 編＞／＜Basic 編＞　☆ Forerunner to Power-Up English ＜入門編＞も好評！
木村友保先生 好評テキスト＜時事英語・リスニング＞テキスト！！　木村友保／NHK 国際放送局監修
NHK WORLD NEWS : Global Perspectives　NHK ワールド・ニュースで学ぶ『聴く英語、読む英語』
NHK ワールド・ニュースと共に時事英語を完全マスター！　３段階のリスニングパートで時事英語に慣れ親しみ、必須の英単語を確認！！
リーディングパートでトピックニュースを完全理解！！！　B5 判　104 頁　ＣＤ付　2,100 円（税込）全 24 章、各章 4 ページ構成。
片野田浩子先生 大好評テキスト＜TOEIC ＞シリーズ！
A Shorter Course in TOEIC Test Reading 450, 550, 650　K（カタノダ）メソッズによる『５分間』新 TOEIC テスト・リーディングシリーズ
A Shorter Course in TOEIC Test Listening 450, 550, 650　K（カタノダ）メソッズによる『５分間』新 TOEIC テスト・リスニングシリーズ
サブテキストに！　半期用教材として！　使い方多様！　大好評『５分間』シリーズ　B5 判　各 735 円（税込）
〒162-0801 東京都新宿区山吹町 361　TEL: 03-3268-2311 ・ FAX: 03-3269-2486 ・ E-mail: nanundo@post.email.ne.jp ・ URL: http://www.nanun-do.co.jp/

も、人が集まるレストラン、喫茶店、ファストフード店などではどこでもWi-Fiが使えるようになっていた。特に登録する必要もなく、到着したその日からパブリックアカウントでネットに接続ができるようになっていた。ネットがつながらないお店には学生も集まらないのだそうだ。必然的にどこでもネット環境を整備する。これは、日本でも珍しいことではないが、大学町では日本の数年先を行っているような気がした。

また、どの授業でもネットを使うことはごくごく一般に行われていた。どの教室にも無雑作に設置してある端末から、教員はBlackboardと呼ばれる学内授業支援ソフトに接続し、そこから、当日のパワーポイントのスライドショーを開き、授業を始めた。そのファイルには当日の授業スライド、ビデオ、ウェブページなどなどが用意してあり、昔ながらの黒板とそれらを相互に使いながら授業を展開していた。プロジェクターやコンピュータに鍵などかかっていない。パスワード一つで誰でもアクセスできるのである。昔、日本ではテレビの画面には高価な布製のカバーをかけていた。テレビを観るときにはそれをおもむろに持ち上げ、チャンネルをひねっていた。なぜか日本での教室内のコンピュータ使用はその光景を彷彿させてしまう。立派なケースにコンピュータが入り、鍵を開け、プロジェクターを立ち上げる。スクリーンまで自動だが、立派過ぎて鍵をかけてしまう。使用者より管理者からの発想で設置された感がある。高くて、特別なものだ。だから、全ての教室には設置するだけの予算も取れない。どこかが変だ。

学生もこのBlackboardに課題などを投稿する仕組みになっていた。ほぼペーパーレスで授業が運営できる。これが可能になるのは、やはりその使い勝手の良さと授業支援技術者がいるからである。日本でも同じようなシステムがあるが、制約が多い上、困ったときに教えてもらえる専門の技術者がいないなどの理由によりなかなか普及しない。頭を下げなければ教えてもらえないようなシステムは日本の教員は使わない。だが、仕事として授業を支援するスタッフがいれば、自然と教員は授業の質や中身に集中できる。ここに大きな違いを感じた。

教員の仕事に関して言えば、日本と大きく異なるところがあった。それは、学生集めに翻弄されずに、授業や研究に集中できるところだ。これは日本とは雲泥の差があると実感した。学生リクルートはすべてadmissions officeが行う。高校訪問、オープンキャンパス、入学許可まで学部レベルでは普通の教員は全く関わっていなかった。入学者が少ないのは教員や学科の責任ではない。これは学生は直接その学部や学科に入学してくるのではなく、大学に入学してくるため、学部や学科に責任がないという発想である。その学科を専門とする学生が少なくなるとすれば、それは入学後に学科が学生に対して学内での宣伝が不十分であったとか、プログラムに問題があるということになる。また、大学個別の入学試験はないため、入試を作

成 美 堂 2012年 *Seibido New Publications* 新 刊

Practical Reading Expert ---------- 1,890 円(税込)
Science in Focus ---------- 1,995 円(税込)
Bottom Line Business Stories ---------- 1,995 円(税込)
Democracy Around the World
-Ancient Origins and Contemporary Practices- ---------- 1,995 円(税込)
AFP World News Report ---------- 2,520 円(税込)
Challenging BBC on DVD ---------- 2,415 円(税込)
Aim High for the TOEIC® Test ---------- 2,100 円(税込)
Bottom Up Listening for the TOEIC® Test ---------- 1,050 円(税込)
English Ace ---------- 1.995 円(税込)

Reading the New York Times
-Look at Japan, Look at the World- ---------- 2,100 円(税込)
News for You -2012/2013 Edition- ---------- 1,995 円(税込)
America: Images and Realities ---------- 1,890 円(税込)
Doors to Knowledge ---------- 1,890 円(税込)
統合的英語科教育法 ---------- 2,730 円(税込)
COCET 2600 ---------- 1,785 円(税込)

株式会社 成 美 堂 SEIBIDO
〒101-0052 東京都千代田区神田小川町 3-22
TEL 03-3291-2261 / FAX 03-3293-5490
URL https://www.seibido.co.jp e-mail: seibido@seibido.co.jp

る仕事も試験監督もない。日本では入試関係業務が教員の「最も重要な仕事の一つである」などと、大学の規定集に書かれる始末である。よって、学科 chair も例外なく、5時前には研究室を出て、自宅に帰るのである。どうどうと「私は自宅で仕事をしているからあまり大学に来ない」などという教員もいる。学期中に海外出張をする教員もいる。代わりの課題は出たが、補講というものはなかった。誰もそれを非難しない。古き良き大学の姿があると感じた。

また、教員が授業と研究に集中できるのは、academic advisor システムがしっかりしているからであることを知った。特に学部レベルでは、各学部には advisor という教務専門職員がいて、卒業までに学生は何を履修し、どのような資格を取れば、どのような就職があるかなど、すべて詳しくアドバイスをすることになっている。ちょうど教員と教務の間に入るような専門職である。教員に相談に行くのは、授業と研究に関して質問がある時だけである。日本のように教員が授業料の払い込みの催促で、学生の自宅に電話するなどということは想像もつかないらしい。

教員の研究費に関して言えば日本の環境の方がいいのではないだろうか。日本のように「個人研究費」というものは私の滞在したアメリカの大学にはなかった。学科や研究科に予算があり、それを研究費として申請することはできる。また、日本でいう学内「特別研究費」のようなものはある。だが、申請しない限り自由に使える研究費というものはない。必然的に大きな研究費が必要な場合は学外からそれを取ってくるということが必要になる。

だが、本や論文などは日本より簡単に手に入るかもしれない。必要な本は図書館にすでにあることが多い。なければ、すぐに購入してもらえる。届けば、図書館から連絡がくる。図書館スタッフのプロ意識が強い。また多くの雑誌は図書館でオンラインで読めるようになっている。図書館が契約し、雑誌にアクセスが可能となっているようだ。私が探した論文はかなりの割合で、オンラインで読むことができた。所属学会発行以外の論文を、日本からは個人でオンラインで読もうとすれば、１論文 20 ～ 30 ドルくらい払う必要があるが、そのような不便は全く感じなかった。

だが、面倒なのは人を対象とする研究では、全て、研究許可委員会からの承認が必要なことだ。しかも、申請するには、ネットで講習を受けてからでないと申請ができない。これはどの大学でも同じようで、ネット上でアメリカの大学教員・学生共通の講習を受け、簡単な試験を受け、一定の成績を修めないと、研究許可委員会に研究の許可申請すらできない。私のような客員研究員も例外ではなかった。よって、日本では、学生の英語学習調査として、ある学生の日常をビデオで撮影するような研究は、本人の許可を得れば可能だが、アメリカの大学ではまず不可能に近い。なぜなら、そこに他の学生が撮影され、授業の一部が撮影され、大学が特定され、プライバシーにかかわることも多く、画像に映る全ての人々から許可を得ることが不可能であるからだ。許可はまず出ない。

大学生のための新しい英語力診断テスト
VELC Test®［ベルクテスト］
Visualizing English Language Competency Test
2012 年度無料実施中
お問い合わせ：VELC 研究会事務局
東京都千代田区神田神保町 3-21（株）金星堂 内
e-mail: info@velctest.org 電話：03-3263-3828 FAX: 03-3263-0716
http://www.velctest.org

許可なく行った研究は発表できない。

最後にオハイオ大学の日本語教育について報告して、このレポートを閉じたい。オハイオ大学では、田舎の大学にも関わらず多くの日本語学習者がいた。彼らは、日本語が専門ではない上、一,二年程度しか学んでいないにも関わらず、皆、結構上手に日本語を話していた。その理由は何だろうかと考えていたが、ある一点に集約されていることに気が付いた。それは、学習者に「日本語を理解したい、使いたい」という強い欲求があり、その「使用の機会が現実として日常生活の中にある」からである。

彼らはアニメやゲームやコスプレのようなポップカルチャーで日本語に出会い、それをもっと知りたいという動機で日本語を学び始める。内発的な動機づけであるため、必然的に高いレベルで動機が維持される。だが、それだけでは、なかなかあれだけ上達しない。そこに、日本人学生や日本人 TA が深くかかわってくるのである。授業や寮で知り合った日本人との交流により、さらに日本語を学びたいという欲求が生まれるのである。日本人とアニメを一緒に見て、日本人とゲームを一緒にする。日本人と一緒に遊び、互いに英語と日本語を教え合う。Japan Night や Sakura Matsuri を日本人と日本語学習者らが共同で運営し、課外で Japanese conversation hour に出かけ、折り紙を折り、おにぎりを作り、日本流名刺交換を練習する。conversation partner として宛がわれた関係が、自然と深い友情やときには愛情に変わっていく。これは日本語を使う機会が増えることを意味する。facebook やメールでも日本語を使い、日本人留学生たちが帰国後も互いにネットでつながっていく。そして、互いの国をまた訪ねる。こんな言語使用の機会と動機づけが常に存在する。

また、これは日本語教員だけに言えることではないが、語学の教員は授業外でもその言語で学生と話している。外国語を母語とする TA が多いため、このような光景が必然的に生まれる。だが、アメリカ人日本語教員とアメリカ人日本語学習者の間でも、日常的に日本語で会話をしているのである。英語も中国語もフランス語も他の言語でもそれが外国語棟の中では普通の光景であった。日本で同じことを実現することは難しい。なぜなら、日本人同士で英語を話すことが滑稽と映る上、互いにそれを望んでいないからだ。また、英語使用の機会が現実的に少なすぎるため、強い自己管理のできる学生でない限り、しっかり学習して実際の使用に耐えるだけの運用能力をつけることが難しいという現実がある。だが、廊下や研究室で様々な言語が飛び交うあのオハイオ大学の外国語棟での日常風景をみるにつけ、日本でも英語使用の機会をせめて大学の中だけでも増やし、英語をもっと使ってみたい、読んでみたいというような学生を増やす努力をしなければならないと強く思った。日本の大学でも English Lunch, English Lounge, International Table, English Room などの名称で日常的に学生たちが英語を使う機会を提供する大学が増えている。だが、どれも作られた疑似環境でしかない。理想的な語学学習環境とはもっと日常の中に常に「外国語使用の場」があることだ。それは大学が提供するものではなく、個人個人の学習者が自ら作っていくものであろう。教員や大学はそのヒントや入口を提供していけばいいのである。もともと語学学習とは個人学習でしかないのだ。結局、「自律した学習者」しかものにならない。それが外国語学習ではないだろうか。もちろんそれはヴィゴツキーの言う「学習の共同体」を自分の周りに作るという意味でもある。

研究会紹介

授業学研究会（中部）

2010 年度 4 月から開始した「第２次授業学研究特別委員会」は、高等教育における英語リメディアル教育を対象として取り上げ、平成 24 年 3 月に報告書『高等教育における英語授業の研究－学習者の自律性を高めるリメディアル教育－』をまとめ、解散しました。この特別委員会の設立に伴って、中部支部では 2008 年度末から有志が集まり「授業学研究会」を立ち上げ、2012 年 3 月の解散まで合計 30 回の研究会を開催し、リメディアル教育を中心に英語授業に関する理論研究と授業実践の事例分析を行ってきました。この中部支部の授業学研究会の活動を通して、私たちは学生が抱える問題の複雑さと英語教員が直面する状況の困難さを改めて知ることとなり、「英語が苦手」と思われる学生の中には、単に英語学習をサボって

きたから苦手になったのではなく、学生個人ではどうしようもない学習環境にある場合も少なからずあり、その原因が複雑であることがわかりました。

私たち中部支部の授業学研究会メンバーは、全国特別委員会が解散した後も、これまで続けてきた研究活動を継続させ、さらに発展させていきたいと考え、代表の木村友保先生（名古屋外国語大学）を中心に、研究会名を新たに「授業学研究会（中部）」(Developmental Education Chubu Chapter) とし、この4月から授業学研究活動を継続させることとしました。

これまでの授業学研究会の実践事例研究から授業の中で、学習者は様々な課題を抱えていることがわかってきました。従来、そうした課題は、「解決」あるいは「失敗」などのように、分析され、結論づけられてきましたが、私たちは研究会の議論を通じて、そういった「課題」は、明確に「解決」、「失敗」と言い切れるものではなく、学習者の中で同じような課題が絶えず繰り返され、「改善されたり」、「前進したり」、時には「後退する」というものではないか、と考えるようになりました。つまり、授業は常に「過程」であり、その流動性と改善する可能性を視野に入れて、分析しなければならないと考えるようになったのです。今までの研究会活動で、このような授業分析の「新たな視点」を私たちは見つけることができ、このことをこの新しい授業学研究会（中部）では、追求したいと考えています。

こうした授業分析の視点は、決して新奇なものではなく、1970年代以降の認知科学分野の「問題解決（problem solving)」研究、そして1990年代以降の認知科学の成果を実際の学習の中でとらえ直す「学習科学（learning sciences)」分野で、研究され続けており、その中でもBereiter & Scardamalia (1993) が研究している「漸次的問題解決（progressive problem solving)」という洞察が、私たちの活動に理論的基盤を与えてくれると考えています。このことについては、今までの授業学研究会の事例研究と新しい研究会の理論的研究をまとめて、本年度愛知県立大学で開催されるJACET国際大会の公募シンポジウムで発表することになっています。関心を持たれた方は、ぜひ当日会場まで足を運んでいただき、ご議論していただければと考えています。

Bereiter, C., & Scardamalia, M. (1993). *Surpassing ourselves: an inquiry into the nature and implications of expertise.* Chicago: Open Court.

佐藤雄大（名古屋大学）

会員著書紹介

ヴィクター・スティーヴンソン［著］
江村裕文・竹内茂夫・図司有美・神谷健一・
下内充・輿水則子・山口玲子［訳］

『図説 ことばの世界ー欧米の言語史』

青山社　2010年　249頁

本書はVictor Stevensonが1999年に改訂新版として上梓した *The World of Words: An Illustrated History of Western Languages*（初版 *Words*, 1983）の全訳であり、本中部支部会員の下内充（東海学院大学准教授）がゲルマン諸語について記述された第7章の訳出を担当していることに加えて、伊藤光彦（豊橋技術科学大学名誉教授）がケルト語について記述された第5章のproofreadingに関わっている。本書の原副題にあったillustratedを邦訳では主題に「図説」としたところに、本書が少しでも多くの人に親しみやすい存在になってもらいたいとする編集者の心情が感じ取れる。確かに140葉余りの写真や図版が活用されている点に鑑みると、図鑑的要素の大きさから、本書に「図説」を戴くことに無理はない。本稿筆者の書架には、大型版の *Atlas of the World's Languages*（Routledge）の他に、『世界言語文化図鑑』（東洋書林）も見受けられるが、印欧語に特化した記述では本書のほうがはるかに詳しく、単なる図鑑でもない。

さて、本書の構成は、原著のとおり全11章の本文（225頁）ーー 1.「消えたことば」; 2.「遠い親戚：インド・アーリア人」; 3.「バスク語の謎」; 4.「ギリシア語：原子から宇宙まで」; 5.「ケルト語：太古の亡霊」; 6.「ラテン語の遺産」; 7.「北方の諸言語」; 8.「スラヴ語」; 9.「バルト

語」; 10.「インド・ヨーロッパ語族に属さない言語」; 11.「ヨーロッパの国語・民族語」から成り、それに「用語解説」「参考図書」「索引」が附随する。邦訳のみの附加的特徴として、「参考図書」に加えた邦語図書一覧と、「索引」に加えた英単語索引を挙げることができる。

ところで、本書の扱う外面史は印欧語の主たる語派に及ぶが、一般の読者には英語が属するゲルマン諸語を扱う第7章から読みたくなる衝動に駆られるのではあるまいか。第7章は原著では Voices of the North となっており、「英語、ドイツ語、オランダ語、及びスカンディナヴィア諸言語の遠い祖先にあたる、ゲルマン語と呼ばれる文字を持たない言語が歴史に登場する」ところから始まる。序説として、ゴート族の移住と古ノルド語（ヴァイキングの言語）に関する記述があり (pp. 121-25)、続いて、“スカンディナヴィア語: ヴァイキングの遺産”へと話が進み、ハンザ同盟の影響、古ノルウェー語の衰退、17世紀及び18世紀の外国語の影響、古い言語から新しい言語をつくることが語られる (pp. 125-32)。その次に、“高地ドイツ語と低地ドイツ語”の話へと展開し、2つのドイツ語、近代ドイツ語、イディッシュ語についての記述がある (pp. 132-44)。その後、“オランダ語：自立を誇る言語”として、フリジア語（フリースラント語）とアフリカーンス語について簡略な説明がある (pp. 144-50)。而して、いよいよ待望の“英語：世界をつなぐ言語”の説明に突入する。ゲルマン人部族の到着、フランス語との関係、古い言葉から新語を造る人々、アメリカの英語、オーストラリアの英語、スコットランドの英語の記述で第7章は締め括られる(pp. 150-76)。本書の各節各処において提示される多くの具体的事例が、つい難解な記述に陥りがちな英語史本の読みやすさを助長しているのだが、その分、訳出にはさぞ労苦が大きかったことであろうと同情を禁じ得ない。また、適宜掲載される図版や囲み記事も興味深く、一般読者の理解を助けていることは間違いがない——ゲルマン語族（方言地図)、中世の多国間同盟、宗教改革：ルターと印刷所、古英語（方言地図)、中英語（方言地図)、チョーサーの英語、ルネサンス期の英語、アメリカ訛り、ノア・ウェブスター、最初のアメリカ人と後に移住してきたアメリカ人について等々。なお、これは原著者の責任だが、アフリカーンス語と英語の微妙な関係については、Crystal (2003[2]: 43-6) 程度の記述があっても好い。

最後に、本訳書の本質的問題ではないが、日頃から気になっていることを一言述べて、本稿を閉じることにする。それは、本訳書「用語解説」(p. 226) の philology に附けられた文献学・歴史言語学という訳語についてである。伝統的に文献学と称してきた philology に敢えて歴史言語学という術語を加えたのは、訓詁の学としてのイメージを払拭する進取の試みといえるが、必ずしも正確ではなかろう。なぜならば、言語学は一般性を追求するのであって、個別言語の特殊性を追求するものではないからである。歴史言語学といえども例外ではない。20世紀以来 linguistics と棲み分けた感のある philology では、当該の文化や社会を切り離したアプローチは採られない。そこで、本稿筆者としては、ジョンソン研究の泰斗・永嶋大典（大阪大学名誉教授）がかつて提唱した言語文化研究（研究資料を過去に書かれた遺産に基づく）あたりを訳語としておきたい。

大森裕實（愛知県立大学）

掲示板

『JACET 中部支部紀要』編集委員会では、第10号への掲載論文の投稿を受け付けます。以下の要領でふるってご投稿ください。詳細は第9号の投稿規程、支部 HP をご覧ください。

締　切：8月20日
掲載料：刷り上がり１ページにつき1000円の割合で掲載料を払う
長　さ：論文15ページ、実践報告・研究ノート10ページ、書評5ページ程度
注　意：**投稿方法や投稿先が変更される可能性があります。投稿規定詳細とあわせて、ホームページでご確認ください。**
問合せ：JACET 中部支部事務局

中部支部紀要編集委員会

事務局より

◆新入会員のご紹介

2012年2月から2012年4月までの中部支部所属新入会員は以下の方々です。(敬称略、入会順)

Clements, Peter (静岡大学教育学部)、伊藤 明希良 (岐阜聖徳学園大学［大学院生］)、Watts, David (愛知県立大学)、平岩 加寿子 (愛知県立大学［大学院生]、佐橋 義方 (中部大学大学院［大学院生］)

◆2012年度第1回支部総会と英語教育フォーラム開催のご案内

中部支部第1回支部総会と英語教育フォーラムを6月2日（土）に名城大学名駅サテライト（桜通りビル13階） 多目的室にて開催します。支部総会では、2011年度の事業・会計収支と2012年度の事業計画・予算・人事について報告を行います。英語教育フォーラムでは、ワークショップと特別講演が行われます。詳細は、別紙プログラムまたはJACET中部支部プログラムをご覧ください。

◆2012年度支部役員の紹介

2012年度の中部支部人事は以下のように決まりました。(所属・敬称略、50音順)

顧　問　　田中春美
支部長　　大石晴美
副支部長　　大森裕實
事務局幹事　　石川有香
幹　事　　榎木薗鉄也
ニューズレター　石川有香、佐藤雄大、室　淳子
名簿係　　石川有香
ホームページ　佐藤雄大
支部紀要編集委員
塩澤正（委員長)、大森裕實、倉橋洋子、小宮富子、清水克正、津田早苗、下内充、山中秀三、吉川寛

研究企画委員（24名）
石川有香、伊東田恵、今井隆夫、岩城奈巳、榎木薗鉄也、大石晴美、大森裕實、岡戸浩子、片野田浩子、片岡邦好、木村友保、Leah Gilner、倉橋洋子、小宮富子、佐藤雄大、塩澤　正、清水克正、下内　充、津田早苗、馬場景子、村田泰美、室　淳子、山中秀三、吉川　寛

任期は2年となります。なお、そのほかの本部役員につきましては、JACET中部ホームページをご覧ください。

◆事務局変更のお知らせ

2012年4月1日より支部事務局が名古屋工業大学石川有香研究室に移動しました。支部運営についてのご意見ご要望などございましたらお気軽にお寄せ下さいませ。なお、JACET関係のご連絡につきましては、メール表題に[JACET中部]とお書き添えくださいますと幸いです。

メール宛先：　ishikawa.yuka@nitech.ac.jp

◆2012年度JACET国際大会ご案内

第51回国際大会は8月31日（金）・9月1日（土）・2日（日）の３日間、愛知県立大学にて開催されます。

テーマ：　大学英語教育への言語理論の応用
　ーコンテントとコンテクストを重視してー
The Application of Contemporary Language Theories to Higher English Education: Focusing on the Importance of Content-based and Context-based Approaches

◆住所変更届提出のお願い

支部会員のみなさまに、紀要やnewsletterなどの郵便物をお届けできない事例が増えています。お手数ですが、転居の際には、JACET本部事務局と中部支部事務局の両方に、住所変更届をご提出ください。

詳細は、以下のサイトをご覧ください。

JACET中部支部ホームページ
http://www.jacet-chubu.org/

◆ニューズレターは会員の皆様のフォーラムです。ご意見、ご要望等は事務局までメールでお送りください。投稿も歓迎いたします。

中部支部事務局：
〒466-8555　名古屋市昭和区御器所町
名古屋工業大学　石川有香研究室内
ishikawa.yuka@nitech.ac.jp

JACET-Chubu Newsletter 第28号
2012年5月10日発行

発行者：大学英語教育学会中部支部
大石晴美
編集者：　石川有香
佐藤雄大　室　淳子